

多良間島における考古学・人類学的調査

—コテ遺跡・仲筋のヤマトピストウトウンバラの発掘調査—

山崎 真治^{*1} 楠瀬 康大^{*2} 菅原 広史^{*3} 大岡 素平^{*4} 石原 与四郎^{*5}

Archaeological and Anthropological Investigations on Tarama-jima Island: excavations at Kote site and Nakasuji no Yamato-pitsu-tunbara

Shinji YAMASAKI^{*1}, Kodai KUSUNOSE^{*2}, Hiroshi SUGAWARA^{*3}, Sohei OOKA^{*4}, Yoshiro ISIHARA^{*5}

1 はじめに

多良間島は伊良部島・下地島と石垣島との間に位置し、面積は約 20km²、人口は約 1100 人で、地理的には宮古諸島に属する。島の地質は、隆起サンゴ礁からなる石灰岩と表層を覆う赤土や砂丘砂層からなり、最高所でも標高 34 m 程度である。沖縄県立博物館・美術館では、2019 年度から宮古諸島の総合調査を実施しており、その一環として多良間島についても調査を実施した。

2019 年 6 月に実施した予備調査では、北部の砂丘地（仲筋コテ）にて約 2500 年前の遺物を含む黒色砂層を確認するとともに、多良間村教育委員会の桃原薫氏の案内で、北西部の大岩（仲筋のヤマトピストウトウンバラ）の下部に開口した洞穴内において人骨群を確認した。こうした成果を受けて、さらなる調査を計画していたが、2020～2022 年度は新型コロナ（COVID-19）の世界的流行のため、調査の中断を余儀なくされた。2023 年度に入ってようやく状況が改善するとともに、科学研究費「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究—令和の考古学改新—」（研究課題 23H04842）の

活用によって詳しい調査を実施できる運びとなったので、沖縄県立博物館・美術館では、2023・2024 年度にかけてコテ遺跡および仲筋のヤマトピストウトウンバラの試掘調査を実施した。

ここではその成果について概要を報告する。本報告の全体的な内容のとりまとめは山崎が担当し、「3-3 脊椎動物遺体（貝類を除く）」の項目は菅原が執筆した。

調査期間、体制等は以下の通りである。また、調査成果の一部については、1 月 24 日～26 日まで多良間村コミュニティ施設ふれあいフクギ館にて開催された「第 15 回 移動展 in 多良間村」において紹介した。

調査主体

沖縄県立博物館・美術館

調査担当

山崎真治（沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員）

調査参加者

- *1 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan
- *2 西原町教育委員会 〒903-0111 沖縄県中頭郡西原町字与那城 152-5
Nishihara Town Board of Education, 152-5, Yonashiro, Nishihara, Nakagami, Okinawa 903-0111, Japan
- *3 浦添市教育委員会 〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶 1-1-1
Urasoe City Board of Education, 1-1-1, Ahacha, Urasoe, Okinawa 901-2501, Japan
- *4 株式会社 南都（おきなわワールド） 〒901-0616 沖縄県南城市玉城字前川 1336
Nanto Co., Ltd. (Okinawa World), 1336, Maekawa, Tamagusuku, Nanjo, Okinawa 901-0616, Japan
- *5 福岡大学理学部地球圏科学科 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8-19-1
Department of Earth System Science, Fukuoka University, 8-19-1, Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka, Fukuoka, 814-0180, Japan

石原与四郎（福岡大学）、佐藤碧海（同）、大岡素平（株式会社南都（おきなわワールド））、楠瀬康大（株式会社文化財サービス）、後藤雅彦（琉球大学）、主税英徳（同）、山極海嗣（同）

経過

■予備調査：2019年6月12・13日（山崎）

多良間島北部砂丘地の畑地断面（コテ遺跡）にて黒色砂層・焼礫等確認。放射性炭素年代測定により $2435 \pm 20^{14}\text{C BP}$ （PLD-40161 炭化材）、 $2745 \pm 20^{14}\text{C BP}$ （PLD-40162 海産貝類）の年代値を得た。

■1次調査：2024年2月16日（金）～令和6年2月20日（火）（山崎、石原、大岡、楠瀬）

コテ遺跡（畑地断面Ⅰ地点・Ⅱ地点）、仲筋のヤマトピストウトウンバラ試掘、村内洞穴調査

■補足調査：2024年9月26日（木）・27日（金）（山崎、後藤、主税、山極）

コテ遺跡地下探査・測量調査、塩川のヤマトウトウンバラほか踏査・測量調査

■2次調査：2025年2月14日（金）～令和7年2月20日（木）（山崎、石原、楠瀬、佐藤、後藤）

コテ遺跡（試掘区Ⅰ、畑地断面人骨地点）、仲筋のヤマトピストウトウンバラ試掘

協力

多良間村教育委員会、仲筋字会、琉球大学、福岡大学、株式会社南都（おきなわワールド）、株式会社文化財サービス

2 調査の目的

多良間村ではこれまで多良間添道遺跡（多良間村教育委員会 1996）や西高嶺遺跡（沖縄県教育委員会 2000）、塩川井（多良間村教育委員会 1993）などで発掘調査が行われており、多良間添道遺跡では下田原式土器や石器、西高嶺遺跡では $2900 \sim 2200^{14}\text{C BP}$ の焼石を伴う炉跡や貝類・火成岩礫、塩川井では15世紀以降の青磁や褐釉陶器などが発見されている。しかし、これまでに知られている人類遺跡に関する情報は断片的で、人類集団の形質的特徴や生活の実態については不明な点が多く、年代的にも空白の部分が多く残されている。そこで今回、

多良間島の人類史解明をめざした調査を実施した。

3 コテ遺跡の調査

3-1 調査の概要

多良間村仲筋コテ 623 - 1 に所在する（図1の①、図2上）。2019年6月の予備調査において、字仲筋の北方、海岸から約100m、標高約10mの砂丘を切り開いた畑地の法面に露出した砂層中に、焼石や炭化物、貝類を含む、いわゆるクロスナ層に似た黒色砂層を確認したので、2023・2024年度にこの地点の試掘調査を実施した。遺跡名は現地の小字名に基づいてコテ遺跡とした。

遺跡は、島の北海岸に面して南北方向に伸びる砂丘の尾根部分に位置しており、この尾根の西側斜面部を開削した法面に黒色砂層の露出が見られた。遺跡の主要部分は法面よりも東側にあると思われるが、テリハボク等からなる樹林が生い茂っているため、地表面の観察からは遺跡の広がりを把握することは困難である。今回は畑地に面した法面部分、およびその東側の林地内について小規模な調査を行うこととした。

現地調査にあたっては、地権者の仲筋字会（会長森山実夫氏）に文化財調査の承諾をいただくとともにご協力を賜りました。記して謝意を表します。

なお、当該地は保安林となっており、多良間県立自然公園（第2種特別地域）でもあるため、森林法にもとづく保安林内作業行為許可申請書を所管の宮古農林水産振興センターあてに、沖縄県立自然公園条例にもとづく特別地域内土地の形状変更許可申請書を沖縄県自然保護課あてに提出し、以下のとおり許可を受けた。

- ・2023年度
沖縄県指令宮振第97号（令和5年11月20日付け）、
沖縄県指令環第1号（令和6年1月11日付け）
- ・2024年度
沖縄県指令宮振第124号（令和6年12月10日付け）、
沖縄県指令環第5号（令和7年1月21日付け）

2023年度は、南北方向に延びる砂丘の尾根を開削した畑地の法面に、2箇所調査区を設けて試掘



図1 調査地点の地図 (①コテ遺跡、②仲筋のヤマトピストウトウンバラ、③シュフディの洞窟、④塩川のヤマトタウンバラ)

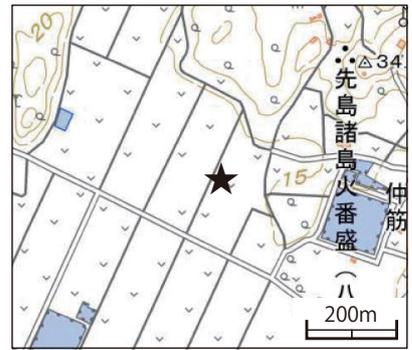
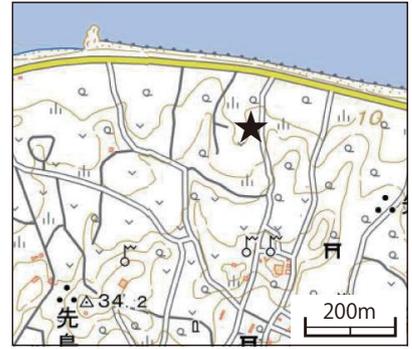


図2 上：コテ遺跡、下：仲筋のヤマトピストウトウンバラ

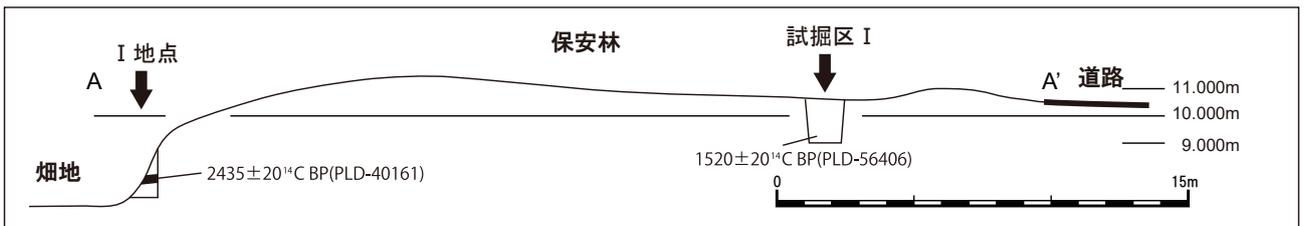
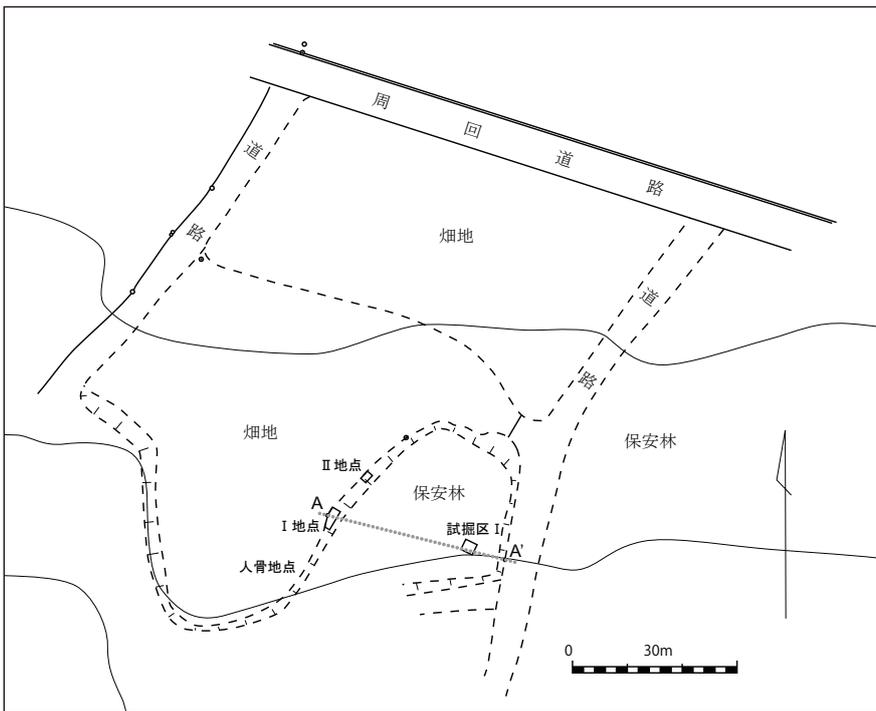
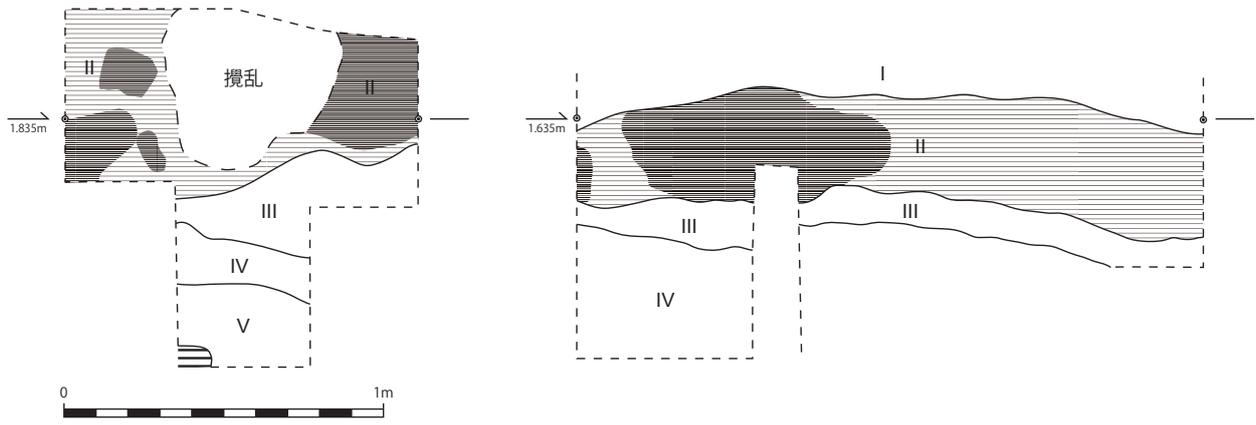


図3 上左：コテ遺跡地形図、上右上：I地点とII地点の俯瞰、上右下：人骨 (HB) 地点の俯瞰、下：地形断面模式図 (標高はGPS計測値にもとづく)
 ※本図では水平方向に対して垂直方向の起伏を強調してある。



I層：灰白色（5YR8/2）砂層。しまり弱。カタツムリ含む。樹根顕著。無遺物。
 II層：黒褐色（10YR3/1）～灰白色（10YR7/1）砂層。しまりややあり。上下の境界は明瞭。所々に明黄褐色（10YR7/6）のパッチが見られる。焼石多含む。樹根、カタツムリ含む。炭化物少量含。遺物包含層。
 III層：漸移層（II層とIV層の中間層）。灰白色（10YR7/1）砂層。樹根顕著。カタツムリ含む。遺物包含層。
 IV層：灰白色（10YR8/2）砂層。しまりややあり。樹根顕著。カタツムリ含む。無遺物。（II地点ではIII層とV層の混合。）
 V層：橙色（7.5YR6/6）混土砂層。しまり有。カタツムリ含。樹根顕著。無遺物層。下方は固結化（ピーチロック？）。

図4 I地点のセクション図（右）およびII地点のセクション図（左）※標高は任意。



I層（表土）：黒褐色（7.5YR3/2）～橙色（7.5YR6/6）砂層。細粒、やや土混じりでしまりややあり。樹根顕著。現代遺物含む。
 II層：にぶい橙色（7.5YR7/4）砂層。しまりなし。粒径10mm以下のカタツムリ、軽石、銭石を含む。樹根顕著、無遺物。
 III A層：にぶい橙色（7.5YR6/4）砂層。やや青黒色。しまりややあり。遺物包含層？粒径10mm以下のカタツムリ含む。
 III B層：橙色（7.5YR7/6）砂層。しまりややあり。粒径10mm以下のカタツムリ含む。
 IV層：明褐灰色（7.5YR7/2）砂層。しまりややあり。-190cm以下まで続く。下部ほどしまりあり。粒径10mm以下のカタツムリ、銭石顕著に含む。オニツノガイ1点、枝サンゴ1点出土。

図5 試掘区Iのセクション図（左、中）およびIV層出土のオニツノガイと枝サンゴ



図6 I地点出土の石英（左）・砂岩（右）



図7 I地点出土の焼礫・貝類



図8 人骨地点採集の人骨（スケールバーは10cm）

調査を行った(図3)。南側をI地点、北側をII地点と呼称する。I地点は南北約2m、東西約1m、II地点は南北約1m、東西約1mの規模で、I、II地点を合わせて調査面積は約3㎡であった。

両地点ともに砂丘砂層中に厚さ30～50cm程度の黒色砂層が確認でき、この黒色砂層が遺物包含層となっている(図4)。ただし樹根等によるかく乱が顕著で、特にII地点ではかなり地層が乱されている状態であった。セクション図ではII層が黒色砂層に相当し、III層は下層の白砂層との漸移層である。IV層は白砂層で無遺物。V層は橙色土混砂層で同様に無遺物、下部に部分的なコンクリーションが認められた。なお、2019年6月に黒色砂層から採取された炭化材から 2435 ± 20 ^{14}C BP(PLD-40161)、シレナシジミから 2745 ± 20 ^{14}C BP(PLD-40162)の放射性炭素年代が得られており、暦年代では2700～2400年前頃に相当する(表1)。

回収された遺物には焼石や貝類、魚骨等があり、このほかに多良間島では産出しない石英片、砂岩片が得られた。海産貝類(破片が多い)は50点ほどあり、ほかに多量の陸産貝類(ミヤコヤマタニシを含む)もみられる。中大型貝類はシャコガイ類、マガキガイ、シレナシジミ、リュウキュウマスオ、アコヤガイ、タカラガイ類、ニシキウズ、レイシ類、オニノツノガイ、ホラガイなどサンゴ礁性の貝類が主体で、焼けたものや細かく破碎したものが多い。多数得られた焼石はサンゴ石や石灰岩主体で、やはり破碎したものが多く(図7)、被火・被熱によって破碎したものと思われる。なお、同時期の遺跡である西高嶺遺跡でも同様の状況が認められた(沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料の観察にもとづく)。

陸産貝類も多く得られており、ミヤコヤマタニシも認められた。魚骨は少なく、ブダイ、モンガラカワハギなどが含まれている。また、多良間添道遺跡ではイノシシ骨が多数出土したと報告されているが、今回はイノシシ骨は得られなかった。

2024年度は、遺跡の東側への広がりを調べるための補足調査として、9月26日に琉球大学考古学研究室のご協力をいただき、地下探査を実施した。保安林内および道路付近に側線を複数設けて探査した結果、保安林内の南側である程度の反応が認めら

れたが、深度がかなり深い(－2m以上)ようであった。

その結果を受けて、畑地露頭と畑地東側を南北に走る道路との間の保安林内に小規模な試掘区(試掘区I)を設けて地表下約2mまで掘削を行った。基盤には到達しておらず、掘削底面以下も砂層がかなり厚く続くものと思われる。試掘区壁面でI～IV層まで4枚の堆積層(砂層)を確認したが、まとまった遺物包含層を確認することはできなかった(図5)。人為的作用がうかがえる遺物として、試掘区最下層(IV層)から殻口部が破碎されたオニノツノガイ1点と焼けた枝サンゴ1点が出土した(図5右)。前者に見られる殻口の破損は、肉を取り出す際の人為的な破損と考えられ、類似の破損は西高嶺遺跡出土のオニノツノガイにも認められる。このオニノツノガイについて放射性炭素年代測定を実施したところ、 1520 ± 20 ^{14}C BP(PLD-56406)の年代値が得られた(表1)。これは畑地断面で確認された無土器文化期包含層よりもかなり新しい年代であり、包含層は試掘区地点まで伸びていないか、包含層の延長がさらに深く埋没している可能性が考えられる(図3)。

このほか、2025年度の調査期間中に、畑地法面(2024年度I地点の南側：図3の人骨地点)で断片的な人骨(大腿骨、脛骨、腓骨、指骨等)を確認した(図8)。このうち、脛骨の放射性炭素年代測定を実施したところ、 875 ± 20 ^{14}C BP(PLD-56405)の年代値を得たことから、この人骨は中近世のものと推定できる(表1・2)。この人骨については今後詳しい調査を実施予定である。

3-2 出土遺物

図6は粗質な石英と砂岩の礫片(破片)。石器というよりも石材として搬入されたのかもしれない。コテ遺跡と同時期の西高嶺遺跡では、径10～5cm大の緑色岩礫が10点ほど出土しており、被火によって破断したものが多い。

図15の1・2はシレナシジミの腹縁粗加工品で、成長線に沿って腹縁が欠損している。西高嶺遺跡では略完形のシレナシジミの貝殻が多く出土しており、腹縁粗加工品のほか、典型的な貝刃も見られるほか、リュウキュウマスオやサメザラも貝刃に利用

されている。シレナシジミは多良間島には現生しないが、西高嶺では略完形の貝殻が比較的多く出土しており、かつては生息していたのかもしれない（図9）。3はかなり大型のヒレジャコガイ右殻背縁部を割り取った板状貝片の縁辺に、加工を施した刃器と思われる。4はリュウキュウサルボオの殻頂に穿孔したもので、穿孔部周辺に摩滅がみられる。垂飾品であろうか。5は踏査時に運城御嶽で表面採集したイモガイ製品。背面下部に穿孔されている。同様のイモガイ製品は八重山諸島で広くみられる。

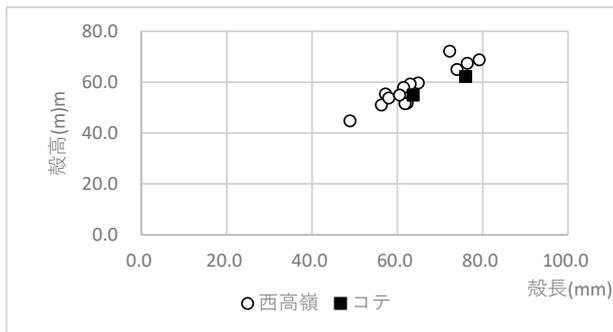


図9 シレナシジミの殻長・殻高分布図（西高嶺・コテ）

3-3 動物遺体（貝類を除く）

I地点の黒色砂層から出土した動物遺体は、発掘作業中に目視で出土を確認して取り上げた資料（PU資料：図18A）、及び3mmと5mmメッシュを用いた篩掛けによって得られた資料（篩別資料：図18B）である。現生標本との形態比較により種同定を行ったところ、37点が同定可能で、甲殻類・魚類6群・爬虫類2群に分類することができた。甲殻類はカニ類の不動指および可動指、魚類はエイ類・ヨコシマクロダイ・ブダイ科・ニザダイ科・モンガラカワハギ科が同定されたほか、分類群不明の魚類が得られた。爬虫類はウミガメ類の甲板破片、ヘビ類の椎骨である（表3）。

ブダイ科が同定標本数の上では最も多く同定され、その他の分類群は数点ずつである。出土総数が少量であるため傾向を比較するにはやや心もとないが、これら分類群は琉球列島の遺跡から出土する動物群としては一般的にみられるもので、特に魚類の分類群は島の周囲のサンゴ礁域で漁撈活動が行われたと解釈される組成傾向と言える。

一方、無土器文化期の八重山諸島の動物遺体の出土様相としては、イノシシ骨が含まれる傾向が一般

的であるが、本資料中には明確に同定可能なものは含まれていなかった。多良間島内で同時代に比定される西高嶺遺跡ではイノシシ骨が多数出土していることから、同島内のイノシシの自然生息ないし他の島からの持ち込みにより、島内においてイノシシの利用があったことが窺われる。これに対し、本資料の組成傾向は、コテ遺跡がウミガメや魚類などの海産資源を利用するための活動域であったことを示唆するものと指摘できよう。

また、資料中には焼けた骨（図18C）が10点観察された。同定可能であったものはウミガメの甲板およびモンガラカワハギ科の背鰭棘で、それ以外は分類不明の魚骨片が8点である（焼骨のうち分類群不明の8点は細片であることから集計対象外とした資料であるため、表3中に含めていない）。本地点の相伴遺物には焼石や焼けた貝殻もみられることから、これらとともに被火したものと考えられる。人工遺物と相伴する動物遺体は食料残滓と捉えられることから、これらが被熱している状況は、食料として動物を利用する過程で火が用いられていた様子が想起される。

その他、分類群不明の骨片1点にカットマークが観察された（図19D）。長さ約5mmの直線状で、幅は表面から底に向かってやや狭まる溝状の形態を呈しており、人為的な作用による痕跡の一つと捉えられよう。傷痕の形状からはそれほど鋭くない道具により付されたものと見られ、本遺跡から採集されている貝製刃器などとの関連性が示唆される。

4 仲筋のヤマトピストゥトゥンバラの調査

4-1 調査の概要

多良間島北西部の畑地の中に孤立した岩塊がいくつか分布しており、そのうちの一つがヤマトピストゥトゥンバラと呼ばれる岩で、多良間村仲筋トカハナ1055-1、1056-1に位置する（図1の②、図2下）。ヤマトピストゥは和名、トゥンバラは大岩のことであり、かつてヤマトからやってきた（漂着した）人々がこの岩の周囲で暮らしたとも、和名の人々の墓と言われている。琉球大学沖縄文化研究所（1964）によれば、仲筋と塩川字の両方にヤマトトンバラと呼ばれる和名の人々の墓があり、岩穴の

中に二三の骨が散在していることが述べられている。ただし、これらが大和人の骨であるかは疑わしいとされ、メーカ墓（ミヤカ）以前の、自然の岩穴を利用して葬った古い時代の墓ではないかとしている。なお、塩川字の東方海岸、クバマガーの近くにもヤマトトンバラ（大和墓）と呼ばれる岩があり（前掲文献）、人骨が残されている（図1の④：-WEB非公開-"N -WEB非公開-"E）。

2019年6月の予備調査において、多良間村教育委員会の桃原氏の案内で現地を確認した際に、大岩の下部に形成された洞穴内において人骨を確認したため、今回詳しい調査を実施した。現地調査にあたっては、地権者の奥平博昭氏、長嶺英明氏、耕作者の高江洲政隆氏には文化財調査について承諾をいただくとともにご協力を賜りました。記して謝意を表します。

今回の調査では、現地の地形測量と洞穴内部の測量、および小規模な試掘調査を実施した。洞穴のある大岩は12×7m程度の規模であり、高さは4m程度である（図10・11）。この岩は孤立しているが、石灰藻球化石が顕著に認められることから、津波石ではなく、この地域の琉球層群の侵食によって取りのこされた石灰岩巨礫と考えられる。大岩の南側下部に東西に貫通する洞穴があり（図12）、北側周囲は所々岩陰状になっている。岩陰部については今回は詳しい調査を実施しなかったが、土器片等の遺物の散布が確認できた。南側下部の洞穴の横幅は約1.5m、天井高は0.5～1m程度である。洞床には拳大程度の石灰岩礫やサンゴ石が多く散布している。洞穴内部には多くの人骨や動物骨（ヤギ骨）等が散布しており、特に北側の洞壁際に多く見られた。一部の骨は壁面部分に残存した堆積物中に含まれている。この大岩は、戦時中には避難所として利用されたということで、その際に洞床が掘削された可能性がある。

洞穴部分は非常に通風の良い環境で、調査中は常時風が吹き抜けている状態であった。内部は非常に乾燥しているが、天井部分には洞窟サンゴも認められ、かつては湿潤な環境の時期があったものと思われる。また、掘削中、堆積層中に数センチ大の空洞が多数見られたが、これらはクモや昆虫が掘削した穴のようである（写真10）。

洞穴内の位置情報の記録には1m四方のグリッドを用いることとし、試掘調査はB5区とD6・7区で実施した。このうちB5区では地表下約60cmまで掘削し、I～III層の3枚の堆積層を識別した（図13）。このうち最上部のI層（黒褐色土：層厚約15cm）が包含層で、骨片や炭化物、陸産貝類等が検出された。I層から採取した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、 150 ± 20 ^{14}C BP（PLD-56407）の年代値を得た。II、III層は褐色粘質土層で、マンガンの沈着部がパッチ状に混在し、礫をはじめほとんど混入物を含まない無遺物層であった。

D6区では壁際の堆積物断面に肋骨2本分が露出していたため、小規模な掘削作業を行った（図14）。この地点では肋骨のほかに椎骨、寛骨、上腕骨等がまとまって検出され、特に寛骨（R）は原形を留めた状態であった。上述の肋骨や近接して出土した椎骨、鎖骨等はある程度原位置をとどめていると考えられることから、遺体の安置→骨化→再移動が繰り返されて人骨の集積が形成されたものと考えられる。この地点から採取した人骨（肋骨）の放射性炭素年代測定を実施したところ、 345 ± 20 ^{14}C BP（PLD-53455）の年代値を得た（表1・2）。人骨の周辺からは土器片や陶器片が採集されおり、いずれも近世頃のものと思われる。

このほか、洞穴内からの採集品として、土器片、陶器片（17世紀後半頃の灰釉碗の底部片）、貝類（シャコガイ類、リュウキュウマスオ、レイシ類、ヤコウガイ、タカラガイ類、マガキガイ、ネジマガキ、陸産貝類など）、人骨、魚骨（ハリセンボンの棘）、サンゴ礫などが得られており、特に焼けた人骨や貝類が含まれている点は注目される（図17右・写真11）。

また、ハリセンボンの棘は、八重山諸島において墓からの出土が散見されることから（石垣市教育委員会2020、2021）、墓に関わるコンテクストで持ち込まれたものかもしれない。今回採集された土器や陶器は、いずれも地元で利用されていた生活用具と見られるもので、ヤマトとの関連を示唆する遺物は見られなかった。

4-2 出土遺物

図16の6～11（9a・9bは同一個体）は八重



図 10 仲筋のヤマトピストゥウンバラ (左：位置図、中：俯瞰 (東より)、右：東側洞口部)

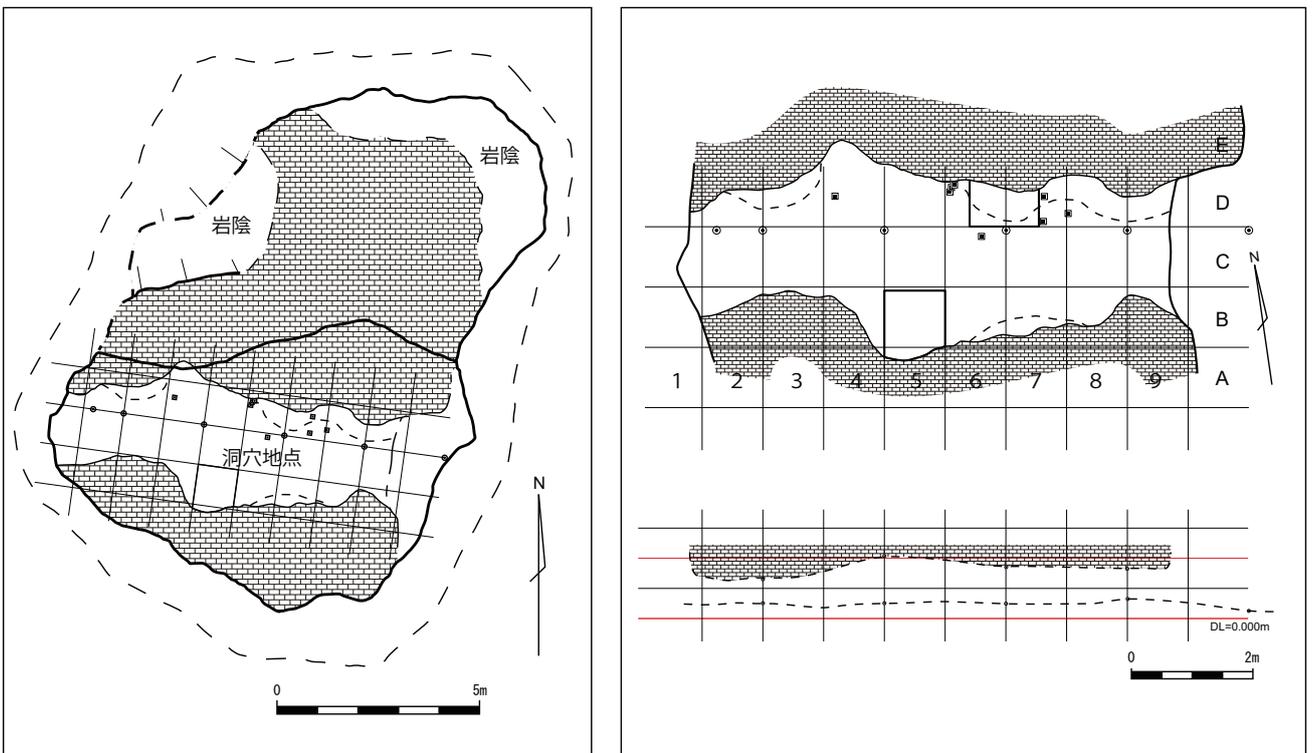


図 11 仲筋のヤマトピストゥウンバラ平面図 (左) と洞穴地点平面図 (右上)、断面模式図 (右下)



図 12 仲筋のヤマトピストゥウンバラ洞穴地点内部 (全天球カメラ写真：写真右が東側洞口)



図 13 洞穴地点 B5 区南壁セクション図

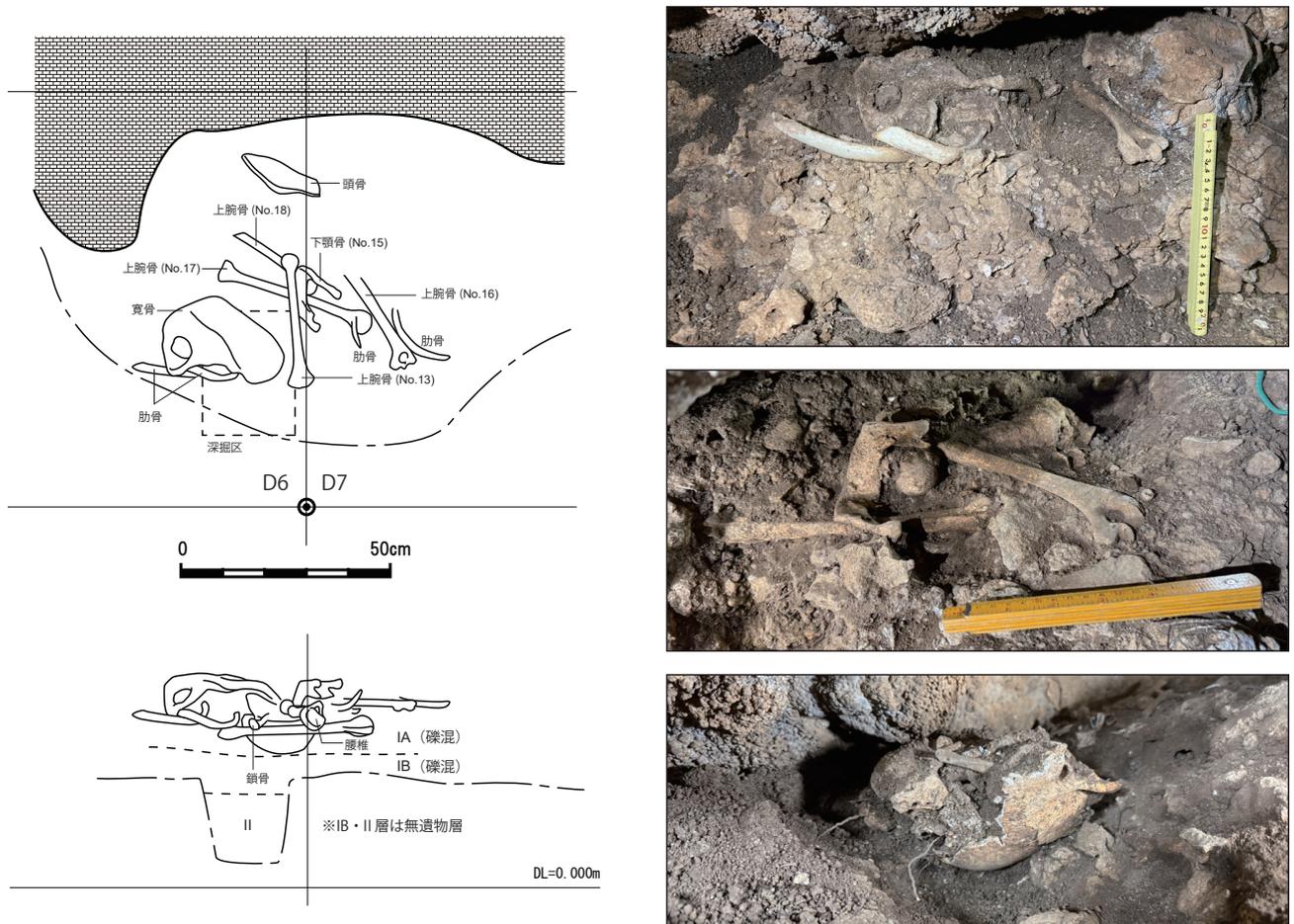


図 14 洞穴地点 D6・7 区人骨検出状況（左上：平面図、左下：立面図、右：人骨検出状況写真）※図中の No. は図 17 に対応、標高は任意。

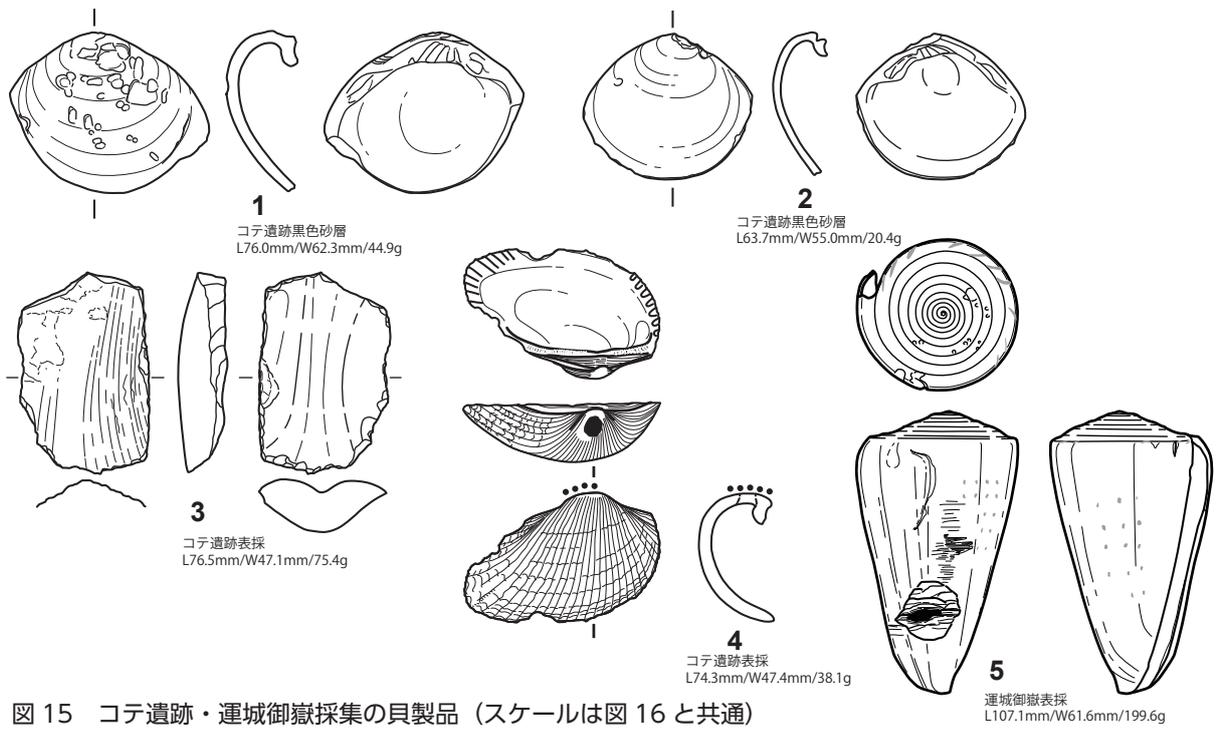


図 15 コテ遺跡・運城御嶽採集の貝製品 (スケールは図 16 と共通)

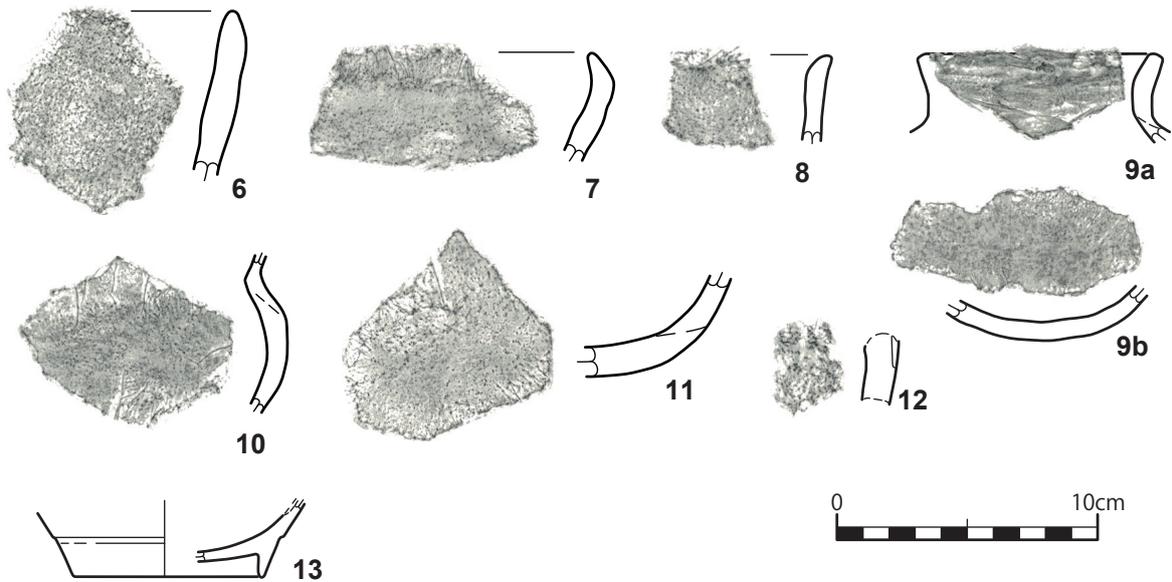


図 16 仲筋のヤマトピストウトウンバラ採集の土器・陶器



図 17 仲筋のヤマトピストウトウンバラ採集の人骨とサンゴ・貝類 (左:下顎骨、中:上腕骨・腓骨、右:焼人骨・サンゴ・貝類)

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年 代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を暦年較正した年代範囲	
							1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-40161	コテ遺跡 畑地断面採集品	種類：炭化材 試料の性状：最終 形成年輪以外 部位不 明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩 酸：1.2 mol/L/L)	-22.30 \pm 0.25	2435 \pm 20	2435 \pm 20	727-719 cal BC (3.8%) 704-695 cal BC (4.3%) 541-430 cal BC (60.1%)	744-687 cal BC (20.1%) 665-645 cal BC (5.5%) 551-408 cal BC (69.7%)
PLD-40162	コテ遺跡 畑地断面採集品	種類：貝（汽水産 貝類）シレナジ ミ） 部位：背面螺番付 近 状態：dry	超音波洗浄 酸エッチング（塩酸：1.0 mol/L)	-2.96 \pm 0.12	2744 \pm 21	2745 \pm 20	Intcal13: 908-889 cal BC (22.6%) 881-844 cal BC (45.6%) Marine13: 541-426 cal BC (68.2%)	Intcal13: 927-830 cal BC (95.4%) Marine13: 642-640 cal BC (0.2%) 624-396 cal BC (95.2%)
PLD-53454	シュフディ洞穴 人骨脇シャコガイ下	種類：炭化物・材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L/L)	-11.22 \pm 0.18	170 \pm 17	170 \pm 15	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1671-1685 cal AD (12.28%) 1732-1768 cal AD (31.06%) 1771-1779 cal AD (6.97%) 1798-1804 cal AD (5.81%) 1927-1941 cal AD (11.34%) 1941-1942 cal AD (0.38%) 1947-1948 cal AD (0.43%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1665-1694 cal AD (18.13%) 1725-1785 cal AD (44.75%) 1794-1811 cal AD (9.85%) 1839-1842 cal AD (0.24%) 1873-1877 cal AD (0.39%) 1917-1954 cal AD (22.09%)
PLD-53455	仲筋のヤマトビ ス トゥットゥンバラ D6区	種類：骨（人骨） 部位：肋骨近位 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出	-14.23 \pm 0.15	346 \pm 18	345 \pm 20	-	-
PLD-56405	コテ遺跡 砂丘断面（人骨地 点）	種類：人骨 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出	-11.25 \pm 0.17	877 \pm 19	875 \pm 20	1165-1181 cal AD (26.06%) 1187-1212 cal AD (42.21%) Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-173 \pm 68 yr) 1377-1547 cal AD (68.27%)	1053-1061 cal AD (2.51%) 1067-1075 cal AD (1.72%) 1156-1220 cal AD (91.22%) Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-173 \pm 68 yr) 1310-1640 cal AD (95.45%)
PLD-56406	コテ遺跡 調査区：試掘区 I 層位：下の白砂 (IV 層)	種類：オニノツノ ガイ 状態：dry	超音波洗浄 酸エッチング（塩酸：1.0 mol/L)	2.33 \pm 0.13	1522 \pm 19	1520 \pm 20	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-173 \pm 68 yr) 770-971 cal AD (68.27%)	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-173 \pm 68 yr) 676-1042 cal AD (95.45%)
PLD-56407 試料No. 3	仲筋のヤマトビ ス トゥットゥンバラ 調査区：B5区 層位：0-5cm (地表- 2cm)	種類：炭化材 試料の性状：最終 形成年輪以外 部 位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L/L)	-25.19 \pm 0.10	149 \pm 18	150 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1679-1695 cal AD (10.66%) 1725-1741 cal AD (10.85%) 1752-1764 cal AD (7.36%) 1799-1812 cal AD (8.53%) 1838-1845 cal AD (3.53%) 1851-1857 cal AD (2.67%) 1858-1858 cal AD (0.17%) 1860-1867 cal AD (3.14%) 1871-1878 cal AD (3.42%) 1916-1942 cal AD (17.26%) 1944-1944 cal AD (0.14%) 1953-1954 cal AD (0.55%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1670-1699 cal AD (14.61%) 1721-1780 cal AD (26.75%) 1797-1815 cal AD (9.82%) 1834-1890 cal AD (21.67%) 1907-1949 cal AD (21.57%) 1951-1954 cal AD (1.04%)

表2 炭素・窒素安定同位体比測定結果

試料No.	試料種	処理前重量 (mg)	コラーゲン回収量 (mg)	コラーゲン回収率 (%)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比 (モル比)	安定同位体対比 (‰)		海産物依存率 (%)
								$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$	
PLD-53455	人骨	789.01	64.17	8.1	40.5	14.15	3.34	-14.1	7.5	81.4
PLD-56405	人骨	452.08	29.368	6.5	39.8	13.34	3.48	-9.7	8.5	132.8

表3 コテ遺跡 I 地点 黒色砂層出土の動物遺体集計表（貝類を除く）

分類群	部位	LR	PU 資料	篩別 資料	分類群	部位	LR	PU 資料	篩別 資料
甲殻類	可動指	L		2	ブダイ科	腹椎	—		1
		R		1		尾椎	—	2	1
	不動指	L		1	ニザダイ科	尾椎	—		1
サメ類	椎骨	—		1	モンガラカワハギ科	腹椎	—		1
ヨシマクロダイ	前上顎骨	L	1	背鰭棘		—		1	
アオブダイ属	前上顎骨	L	1		真骨類	腹椎	—		2
		歯骨	L	1		尾椎	—		4
	R	1		椎骨		—		2	
	上咽頭骨	L		2	ウミガメ類	甲板破片	不	2	4
ブダイ科	歯骨	R		1	ヘビ類	椎骨	—		2
		R		1	合計			8	29

山式土器（中森式）と思われる。粘土～シルト質の胎土で、粒径1mm程度の板状貝殻片を多く含む。色調は黄橙色～赤褐色で、焼成は堅緻である。12は厚みのある板状の焼土塊あるいは土器片で、器面に刺突文？が見られる。13は沖縄産無釉陶器の底部。これらの遺物は近世のものであり、人骨の周辺から出土、採集されていることから、人骨群に伴うものと考えられる。

4-3 人骨

D6・7区を中心に、まとまった数の人骨が得られた。保存の良い成人男性寛骨（右）（D6区）は、二次的に動かされた状態であるが、近接して検出された解剖学的位置を留めていると思われる肋骨、椎骨、鎖骨と一連の個体に帰属する可能性が考えられる（図14）。成人に属する上腕骨が6点（左3、右3）あり（図17中）、このほかに乳幼児の頭骨、四肢骨が見られることから、最小個体数は成人3個体＋乳幼児1個体である。上腕骨、腓骨には病変の見られるものがある（図17中）。比較的保存の良い下顎骨が2点あり（図17左）、咬耗の進んだものと弱いものがある。焼けて白色～青黒色化した人骨（長管骨、頭骨）も見られ、「骨焼き」が行われた可能性が考えられる（図17右）。

5 その他の調査地点

島の北海岸に面したシュフディの洞穴（図1の③）では、洞内に砂質の堆積物が流入しており、沖縄先島津波または明和津波に伴う津波堆積物の可能性が考えられた。この洞床を覆う砂質堆積物上面において、石灰岩礫の配列と、人骨（未成人の上腕骨、尺骨、寛骨）、シャコガイ（シラナミ類）がまとまった状態で確認された。詳細は未調査であるが、シャコガイ直下から採取した炭化物から 170 ± 15 ^{14}C BP (PLD-53454)の放射性炭素年代を得た（表1）。これは明和津波の年代（1771年）にほぼ相当する。引き続き詳しい調査を実施予定である（石原ほか印刷中も参照）。

このほか、紗利真牧場内の大岩（-WEB非公開-"N：-WEB非公開-"E）とタニガーの大岩（-WEB非公開-"NWEB非公開-"E）付近でも踏査を実施し、骨片等の

分布を確認した。

まとめ

2023～2024年度にかけて、多良間村仲筋コテ623-1に所在するコテ遺跡、および多良間村仲筋トカハナ1055-1、1056-1に所在する仲筋のヤマトピストウトウンバラの試掘調査を実施した。

コテ遺跡の畑地断面では、砂丘砂層中に黒色砂層が挟在しており、この黒色砂層中から焼石や貝類、魚骨等の遺物が検出された。2700～2400年前という放射性炭素年代値から、先島諸島に展開する無土器文化期の遺跡と考えられる。また、近隣ではグスク時代に属する人骨も確認されていることから（人骨地点）、先史時代から歴史時代にかけての複合遺跡と評価することができる。

出土した海産貝類にはシャコガイ類、マガキガイ、シレナシジミなどが見られ、焼けたものや破碎されたものも多い。陸産貝類も多く得られている。魚骨は少ないが、ブダイ、モンガラカワハギなどの魚類が含まれており、このほか断片的ながらウミガメも見られた。上記のような魚介類相は、島の周囲のサンゴ礁域での漁労を物語っている。多良間添道遺跡や西高嶺遺跡ではイノシシ骨が多数出土しているが、今回はイノシシ骨は得られなかった。このほか、多良間島では産出しない石英片や砂岩片が出土したことは注目される。

今回の調査によって、多良間村内では多良間添道遺跡、西高嶺遺跡に次いで三例目となる先史時代遺跡を確認することができた。

仲筋のヤマトピストウトウンバラでは、畑地の中にある大岩の下部に形成された洞穴内から、多数の保存のよい人骨とともに土器片や陶器片（17世紀後半頃の灰釉碗の底部片）、海産貝類（シャコガイ類、レイシ類、ヤコウガイなど）、人骨（成人・乳幼児）、魚骨（ハリセンボン）などが採取された。貝類や人骨の中には焼けたものも含まれており、注目される。今回採集された土器や陶器は、いずれも地元で利用されていた生活用品と見られるもので、ヤマトとの関連を示唆する遺物は見られなかった。採取した人骨や炭化物の放射性炭素年代測定からは、近世以降の年代値が得られており、これらがミャーカ以前の、自然の岩穴を利用して葬った古い時代の墓ではない

かという想定（琉球大学沖縄文化研究所 1964）は、十分にあり得ると考えられる。

謝 辞

資料整理にあたり、土器、陶磁器については山本正昭氏、大瀨永寛氏、貝類については黒住耐二氏、菊川章氏、人骨については藤田祐樹氏、平野力也氏に御教示をいただきました。記して謝意を表します。

参考文献

- 石垣市教育委員会 2020 『川平大兼久古墓群』 石垣市文化財調査報告書第 37 号
- 石垣市教育委員会 2021 『真栄里撫原古墓群』 石垣市文化財調査報告書第 40 号
- 石原与四郎・佐藤碧海・大岡素平・山崎真治 印刷中「多良間島の洞窟の 3 次元形態」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』 19
- 沖縄県教育委員会 2000 『空港整備予定地周辺の遺跡—与那国空港・新多良間空港・波照間空港整備予定地周辺における遺跡詳細分布調査報告書—』
- 多良間村教育委員会 1993 『多良間村の遺跡—村内遺跡詳細分布調査報告—』
- 多良間村教育委員会 1996 『多良間添道遺跡発掘調査報告』
- 琉球大学沖縄文化研究所 1964 『宮古諸島学術調査研究報告 地理・民俗編』：134-135 頁



A コテ遺跡 I 地点のウミガメ・魚骨 (PU 資料)



B コテ遺跡 I 地点の動物遺体 (篩別資料)



C 焼けた動物骨



D 骨にみられるカットマーク

図 18 コテ遺跡出土の脊椎動物遺体



写真 1 コテ遺跡畑地断面の黒色砂層 (2019 年)



写真 2 同 I 地点掘削作業のようす (2024 年)



写真 3 同 I 地点セクション



写真 4 同 II 地点セクション



写真5 地下探査の様子 (2024年9月)



写真6 コテ遺跡試掘区の遠景 (北東より)



写真7 同試掘区Iの近景 (北より)



写真8 同試掘区Iセクション (東壁)



写真9 仲筋のヤマトピストットウンバラ調査状況



写真10 同堆積層中に見られた空洞とクモ遺骸



写真11 同ハリセンボンの棘